特集2：つくばアートフィールド

芸術学生の頭の中
なぜ芸術を「大学」で学ぶのか？

Artist:
原田 多鶴
HARADA Tazuru
筑波大学芸術専門学群
デザイン専攻 2 年

Writer:
池田 寛子
IKEDA Hiroko
筑波大学芸術専門学群
芸術学専攻 2 年

●《1/2》(2011)

●《45°》(2011)

落ち着いた物腰で、芯が一本とおっているような印象を受ける原田多鶴（はらだたづる）さん。そんな彼女のしっかりとした雰囲気に私は一緒に入学した当初から惹かれていた。そうして交流を持ってきた私たちだが、デザインを専攻し建築を学ぶ原田さんと美術史を専攻している私とでは、制作をする立場としない立場という大きな違いがある。同じ芸術専門学群に席を置きながらも、大学生活の中で考えていることはだいぶ違うのではないか。制作する側の心理や頭の中をのぞいてみたくなった。学問として芸術をとらえている私に対して、彼女にとって芸術とは自分の生きる術のひとつ。大学は学問をする所という認識が一般的な中、学問とは少し違うもののように思える芸術を、大学で学ぶ意義はどこにあるのか。

新しいものを生み出す：総合的視野

自分のアイデアによって作品を生み出すのは、正直なところ、誰かに教わったりせずに一人でもできることだ。制作の技術面を磨きたいというのが目的ならば、大学より専門学校のほうが効率的に技術が身に付くこともあるだろう。ではなぜ大学で芸術を学ぶのか?それは、総合的視野を養うためである。
「基礎技術を身につけることはもちろんだが、大学は技術を磨く場というよりは、いろんな知識や見方を自分なりに組み合わせて、また新しいものを生み出していく術を身につける場だ。」

これは、授業中に教授が言った言葉だそうだが、なるほどと今でも心に残っているという。自分のアイデアによって作品を作り出すことは一人でもできると前述したが、その「アイデア」自体を育てる場所が大学なのではないだろうか。大学に来たからには、技術の習得にとらわれるよりも、いろんなものの見方や知識を吸収し、総合的な視野を養うことに意識を傾ける。原田さんはそれを常に心がけていた。これは芸術の分野に限らず、大学、特に筑波のような総合大学の学生に言えることであろう。大学生活で得た視野を作品へと昇華させていくのが原田さんならば、私は何に発揮していけばよいのか。そもそも、総合的視野は私の中で養われつつあるのか?大学生活に対する態度を、考え直させられた気がした。

方向性を模索する

原田さんは高校時代の友達から「どちらかというと、デザイナーと言うよりは作家向きだよね」と、言われたことがあった。
「確かに、明確なクライアントに向けて、人と相談しながら何かを作りあげていくのは自分にはあまり向いていないのではと思っていました。その頃は、デザイナーが作るものに魅力を感じてはいましたが、自分としては、アート要素の強い作品を作っている方が楽しかった。」と彼女は言う。

興味あるものの中から大学でしかできないことは何かと具体的に考えた末、建築を選んだ彼女。専門的な建築の構造、製図の仕方、都市全体に関することなどは、大学で学ばなければ身に付かない部分もあるのではと考えたそうだ。しかし建築は、筑波大学ではデザインの中に入る。「大学」でやりたい事と、「今」やりたいことは少し異なっていた。でも建築かデザインどちらかに傾倒する必要はない。そう考えた原田さんは、現代アート的な作品を最近は制作し始めている。

「建築はまだ勉強中で、自分を表現する手法には自分の中でなっていないけれど、将来的に何か形にまとまっていったらいいなと思っています。私が今作りたいものは、誰にでも理解できるけど、新しい視点だな、と思ってもらえるようなもの。これを表現するために、今は建築というより現代アートの手法を使っています。」

作品の方向性：日常での感覚を題材に

原田さんは大学に入る前に、受験のための基礎的練習として石膏デッサンを長くやっていた。一般的に石膏をデッサンする理由は、白いと影がわかりやすく、物体を把握するのに適しているためだ。しかし、白くて影がよくわかるものならば石膏でなくてもいいのではないかと、原田さんは身の回りの白いものを探してデッサンをしてみている。この発想をもとに、鉛筆のデッサン画で白黒のものを描くおもしろさを探求していくため、「white series」として続けていこうと思っているそうだ。その中で、学園祭の展示に出したのが、シメジのデッサンだった。隣にリンゴのデッサンも並べてみたが、シメジの白黒画面における新鮮な存在感に押され、リンゴはひどくつまらなく見えた。ありふれた白い物がモノトーンで描かれることによって生まれる画面の美しさが新しかった。この新鮮さが鑑賞者にもありありと伝わるかと言われたら、感じるところはやはり人それぞれだ、としか今のところは言えないかもしれない。しかし「白いもの」という世の中に無数にあるものを対象として展開していこうとしているこのシリーズには大きな可能性がひそんでいる気がした。「主役」が意外なものであるほど、鑑賞者は新たな世界を目の当たりにすることであろう。白黒画面の中で強力な存在感を放つ身近で意外な白いモノたち。それらが一堂に会した展示が私の頭に一瞬浮かび、わくわくした。

他に、彼女が今興味を持っているのは、工業製品。「1/2」と「45°」がその作例だ。